法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-14

研究展望　2016年（平成28年）

TOYOSHIMA, Masayuki / 表, きよし / 深澤, 希望 / 高橋, 悠介 / 小室, 有利子 / 伊海, 孝充 / 山中, 玲子 / 中司, 由起子 / 豊島, 正之 / 竹内, 晶子 / OMOTE, Kiyoshi / FUKAZAWA, Nozomi / TAKAHASHI, Yūsuke / KOMURO, Yuriko / IKAI, Takamitsu / YAMANAKA, Reiko / NAKATSUKA, Yukiko / TAKEUCHI, Akiko

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)
44

(開始ページ / Start Page)
207

(終了ページ / End Page)
236

(発行年 / Year)
2020-03-25

研究展望　二〇一六年（平成二十八年）

二〇一六年に刊行された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。単行本（表きよし）、資料研究・資料紹介（深澤希望）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽と宗教（高橋悠介）、能楽史研究（小室有利子）、作品研究（伊海孝充・山中玲子）、狂言研究（中司由起子）、国語学的研究（豊島正之）、比較文学研究（竹内晶子）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆を行っているため、全体を展望するというより個別の論の紹介が主体となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏も少なくないものと思う。ご寛恕を乞う。

【単行本】

『伊藤正義中世文華論集第3巻　金春禅竹の研究』（伊藤正義著。樹下文隆・落合博志編。A5版552頁。1月。和泉書院。一六五〇〇円）

平成21年に逝去した伊藤正義の著作集の3巻目。昭和45年に赤尾照文堂から刊行された『金春禅竹の研究』の全文と、その前年にわんや書店から刊行された表章との共著『金春古伝書集成』の伊藤執筆分の解説と伊藤作成分の系図、『金春禅竹の研究』刊行以前の禅竹能楽論や金春系図に関する論考を収録する。『金春禅竹の研究』は「Ⅰ禅竹序説」「Ⅱ禅竹の能楽論」「Ⅲ禅竹にみる伝承と信仰」という構成で、大正4年に吉田東伍の『禅竹集』が刊行されて以来目立った進展のなかった禅竹研究に飛躍的な発展をもたらした研究書である。本書では「『金春禅竹の研究』補遺」として他の伊藤の禅竹研究の成果を収録することにより、禅竹伝書や禅竹能楽論についての著者の幅広く奥深い研究を一望することができるようになった。

『大研究　能と狂言の図鑑』（国土社編集部編。A4判80頁。2月。国土社。三八〇〇円）

児童書だが、能・狂言の演技・作品・扮装など幅広い事柄が取り上げられており、大人でもこれ一冊読めば鑑賞に役立つ内容になっている。法政大学能楽研究所が監修を担当している。

『能楽資料叢書4　御囃子日記』（小林准士校訂・法政大学能楽研究所編。A5判332頁。3月。野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」）

能楽研究所と国内外の研究者が共同で研究を行う共同利用・共同研究拠点としての成果を刊行している能楽資料叢書の4冊目。島根県立図書館蔵の『御囃子日記』を翻刻し、小林准士「解題」と槻宅聡「「御囃子日記」の番組にみる演者の動向」を収録する。この資料は江戸後期の松江藩における舞囃子や狂言などの記録で、天保12年から文久2年までの催しが記載されている。町人の役者のとりまとめ役だった瀧川伝右衛門が作成したもので、正月の松囃子や家老・町奉行の慰みのための催しなど、松江藩での能楽の様子を具体的に知ることができる。

『能面を科学する　世界の仮面と演劇』（神戸女子大学古典芸能研究センター編。A5判344頁。3月。勉誠出版。四二〇〇円）

平成26年11月に神戸女子大学で行われた国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」での講演や研究発表を基にまとめられたもの。「第Ⅰ部・見つめる能面」では大谷節子、山折哲雄、金剛永謹が能面調査結果や宗教学、演者の視点から能面を考察する。「第Ⅱ部・世界の仮面を見つめる」では、ピーター・W・マルクス、廣田律子、李応寿がヨーロッパ・中国・韓国の仮面と仮面劇について考察している。「第Ⅲ部・能面を見つめる」は吉田憲司、ジュリー・イエッツィー、宮本圭造、竹本幹夫、根立研介、スティーヴェン・マーヴィン、高妻洋成、杉山淳司、モニカ・ベーテが、それぞれの研究分野から能面の特色を探っている。様々な角度から能面を追求した研究集会の充実ぶりが伝わってくる。

『乱舞の中世　白拍子・乱拍子・猿楽（歴史文化ライブラリー420）』沖本幸子著。四六判206頁。3月。吉川弘文館。一七〇〇円）

メロディーの時代だった平安時代からリズムに乗る楽しさに人々が目覚めた中世へと転換していくという視点から、白拍子・乱拍子や猿楽を考察する。「白拍子の世界」では「かぞふ」と表現される白拍子がどのような芸能だったかを細かく分析し、白拍子舞の面白さを考察する。「乱拍子の世界」では、貴族・僧侶・稚児の乱拍子の考察を通して乱拍子の特徴に迫る。「〈翁〉と白拍子・乱拍子」では千歳・三番叟と乱拍子、父尉と白拍子・乱拍子との関わりを検討し、〈翁〉の乱舞としての性格を指摘する。「能と白拍子・乱拍子」では白拍子や乱拍子が能に及ぼした影響が考察されている。明快にわかりやすく論が進められていく書である。

『高松松平家歴史資料目録Ⅳ　能面　能楽器』（香川県立ミュージアム編。A4判変型95頁。3月。香川県立ミュージアム。一二〇〇円）

高松松平家伝来の能面57点と楽器類25点を紹介する。高松松平家は水戸藩初代徳川頼房の長男頼重を初代とし、江戸時代を通じて能への取り組みが盛んだったことから、多くの能面などの能道具が遺された。三好賢子「高松松平家の能楽資料について」では幕末期の高松松平家の演能の様子と明治以後の能道具の変化が考察されており、現在の能道具は高松藩伝来のものと近代収集のものとが共存していることを指摘している。

『世阿弥　身心変容技法の思想』（鎌田東二著。A5判347頁。4月。青土社。二六〇〇円）

身心変容技法（身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる諸技法）という観点から世阿弥を考察する。第一章世阿弥の冒険、第二章大和の国の祭礼と申楽と細男の舞、第三章身心変容技法の起源としての洞窟、第四章身心変容技法の展開、第五章身心変容技法としての歌と剣、第六章芸術・芸能とシャーマニズム、第七章神話的時間と超越体験、第八章トランスの身体の探究、終章世阿弥力顕現という構成で、独特な視点と幅広い材料を駆使して世阿弥の特徴を探っている。

『多田富雄のコスモロジー　科学と詩学の統合をめざして』

多田富雄著。四六判272頁。5月。藤原書店。二二〇〇円）

免疫学者として活躍しながら能にも深い造詣を持ち、多くの新作能を生みだした著者が様々な場に発表した文章を集成している。「Ⅱ能と現代」において自作の新作能〈一石仙人〉や石牟礼道子作の〈不知火〉、能〈楊貴妃〉や〈鵺〉、序ノ舞や世阿弥の『三道』、さらには21世紀の能への提言など様々な視点から能を論じており、能に対する思いが伝わる書となっている。

『世阿弥の謎』森田恭二著。B6判172頁。6月。創英社・三省堂書店。一六〇〇円）

日記などの資料から多くの記事を紹介しつつ、猿楽の活動について考察する。第一章中世猿楽者の存在形態、第二章世阿弥の生涯、第三章宇治申楽の時代、第四章「大乗院寺社雑事記」に見る薪猿楽関連資料の検討といった構成で、第二章では世阿弥の出自や佐渡からの帰還などについて検討がなされている。

『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ（阪大リーブル57）』（大槻文蔵監修・天野文雄編集。四六判318頁。7月。大阪大学出版会。二三〇〇円）

平成25年から26年にかけて大槻能楽堂自主公演において行われた講演や対談を収録している。「第一部・世阿弥の人と芸術」には、宮本圭造（世阿弥、その生涯）、松岡心平（世阿弥、その作品と芸風）、渡邊守章（世阿弥、その理論）、大谷節子（世阿弥、その先達と後継者）、天野文雄（世阿弥、その

環境）の講演と、各人の田中貴子との対談が収められている。「第二部・世阿弥の能、その魅力」には、梅原猛（世阿弥と私）、馬場あき子（『実盛』―世阿弥が確立した「軍体」の能）、天野文雄（『松風』―世阿弥が仕上げた「幽玄無上」の能）、山折哲雄（世阿弥の亡霊（シテ）演出法）、大槻文蔵・天野文雄（「記念能」を語る）の講演が収められている。大槻能楽堂の意欲的な取り組みと、それぞれの講演者の能へのアプローチ方法が窺える。

『日本を知る〈芸能史〉上巻　アジアの視点』田口章子編著。A5判223頁。10月。雄山閣。二八〇〇円）

京都造形芸術大学で15年にわたり行われてきた「公開連続講座・日本芸能史」から、「アジアの視点」というテーマに関わるものを取り上げる。アジア諸国の芸能や日本の芸能が多彩に紹介されているが、能・狂言については諏訪春雄がアジアの芸能がどのような影響を与えたかを論じている。

『幕末期狂言台本の総合的研究　大蔵流台本編』（小林千草著。A5判310頁。10月。清文堂出版。三八〇〇円）

成城大学図書館蔵『狂言集』14冊に収録されている狂言台本のうち、大蔵流のものを考察する。第Ⅰ部は〈柿山伏・鏡男・鬼瓦・悪太郎・老武者・骨皮・墨塗・武悪〉の八曲について詳細に考察し、これらの台本の資料的位置づけと言語状況についても考察がなされている。第Ⅱ部は8曲の翻刻、第Ⅲ部は〈武悪〉の総索引となっている。日本語学の研究を基盤としながらも、能楽研究や文学研究をも視野に入れた総合的研究を目標とする書である。

『霊と現身　日本映画における対立の美学』（ツヴィカ・セルペル著。A5判280頁。10月。森話社。三八〇〇円）

日本映画がどのような伝統的要素によって構成されているかを考察したもの。「Ⅰ内容・構造・美学」では黒澤明監督の「乱」や「蜘蛛巣城」、新藤兼人監督の「藪の中の黒猫」などを取り上げる。「Ⅱ要因と象徴としての自然」ではさまざまな映画作品の自然要素を考察している。日本映画の研究だが能楽に関する事柄も随所に登場し、著者の能楽に対する思いの深さが感じられる。

『平成二十八年度国立能楽堂特別展示　宇和島伊達家の能楽』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判変型127頁。10月。日本芸術文化振興会）

平成28年10月5日から12月7日まで国立能楽堂資料展示室で行われた展示の図録。能・狂言面、指面、能絵鑑、楽器、古文書に分けて写真を収録している。宇和島藩は仙台藩初代伊達政宗の長男秀宗を藩祖とするだけに、仙台藩同様に能楽に熱心だった様子が窺える。「指面」は能面のミニチュア百面で、仙台藩五代藩主伊達吉村の娘の徳子が宇和島伊達家四代の伊達村年に嫁ぐ際に持参したものという。『能絵鑑』は

明治時代に旧鯖江藩主間部家より購入したもので、国立能楽堂所蔵本・法政大学能楽研究所所蔵本との関わりが興味深い。田邉三郎助「宇和島伊達家の能・狂言面」、小林健二「宇和島伊達家伝来の『能絵鑑』と『指面』」、岩城賢太郎「宇和島伊達家の能楽の諸相―『乱舞方重習』と五代藩主村候の治世期を中心に」が巻頭に、「資料解説」と「宇和島伊達家能楽関連年表」が巻末にある。

『京都市立芸術大学日本伝統音楽センター研究報告Ⅱ　謡を楽しむ文化―京都の謡の風景』（藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江共編。A5判310頁。10月。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。一八五二円）

日本伝統音楽センターでの研究会の成果などをまとめたもの。「第一部・岩井家旧蔵資料」には京都市立芸術大学が京観世岩井家の後裔から寄贈を受けた資料の目録や展観の記録、『元禄年間能組控』などの重要資料の翻刻が収められている。「第二部・岩井家と謡の文化」では岩井家と関係の深い資料である『あやはとり』『そなへはた』『岩井家所蔵目録』を紹介・考察、岩井家資料に触発された作品研究「能《逆矛》考」（味方健）も掲載されている。「第三部・近代の謡の文化」は『京都日出新聞』や「福王流平岡家一門の素謡番組」、オリエントの謡曲SPレコードの考察を通して京都の近代の謡の広がりを探っている。資料の紹介からさまざまな考察まで豊かな内容の報告書となっている。

『能の本』（村上ナッツ文・つだゆみマンガ・辰巳満次郎監修。四六判320頁。11月。西日本出版社。一五〇〇円）

〈高砂・敦盛・井筒〉など能の入り口にふさわしい作品20曲について紹介する。各曲とも1頁のマンガと「ものがたり」、辰巳満次郎の見所紹介という組み立てになっている。収録された曲数は少ないが、曲の内容紹介にあたる「ものがたり」が詳しく、読むだけでその曲の様子がよくわかるようになっている。辰巳満次郎によるコラムや能楽堂紹介なども掲載されている。

『日本を知る〈芸能史〉下巻　生命の更新』田口章子編著。A5判231頁。12月。雄山閣。二八〇〇円）

上巻に続き、京都造形芸術大学で15年にわたり行われてきた「公開連続講座・日本芸能史」から「生命の更新」というテーマに関わるものを取り上げる。能・狂言に関わるものとしては、片山九郎右衛門が能面や修羅能について、茂山忠三郎が狂言面について、天野文雄が能〈頼政〉について、それぞれ論じている。

『文学海を渡る〈越境と変容〉の新展開』岩津航・佐藤文彦・杉山欣也・鈴木暁世・高田茂樹・西村聡著。A5判277頁。12月。三弥井書店。三二〇〇円）

金沢大学人間社会研究域の6名の教員による論文集。その一つとして西村聡「芭蕉葉の夢は破れる―その比較文学的考

察から夢幻能の再検討に及ぶ―」が収録されている。芭蕉という植物が中国や日本でどのように捉えられていたかを詳細に分析し、それが能〈芭蕉〉や〈井筒〉にどのように反映されているかを考察する。夢幻能とは何かという問題にも踏み込んだ考察となっている。（表）

【資料研究・資料紹介】

はじめに、近世の能楽史に関するものを挙げる。入口敦志・江口文恵・近藤弘子・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・竹本幹夫「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享二年分）」（『演劇研究』39。3月）は、『演劇映像研究』2008・2010、『演劇研究』37・38号に続く内容で、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫所蔵『葛巻昌興日記』貞享二年分の翻刻と解説。この年、前田綱紀は四月に江戸へ参勤し、自邸での催しのほか、江戸城二の丸での大名衆御能披露や、広島藩浅野家での能興行など見物に忙しい。その傍ら、田中一閑による『日本書紀』、丹直清（室鳩巣）による『論語』、木下順庵による『易経』など儒学者の講義の記事も目立つ。

長田あかね「長命茂兵衛家文書（二）」（『芸能史研究』213。4月）は、同211号に続く内容で、京都府立山城郷土資料館寄託資料の長命茂兵衛家文書のうち、「南都両神事能への参勤やその他の芸能活動に関わる資料」前半部分の翻刻紹介。付論「南都両神事能における年預の活動―長命茂兵衛を中心に―」があり、文化・天保期の長命茂兵衛の果たした役割が具体的に知られる。

つぎに、注釈に関する論考が二本。天野文雄「「秀次本謡抄」の面影―養老寺蔵『養老之注』をめぐって―」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10。6月）は、岐阜県養老町滝寿山養老寺蔵『養老之注』と再編本『謡抄』の比較によって、失脚により頓挫した「秀次本謡抄」の姿を探る。『養老之注』の寄進者徳永寿昌が秀次配下の武将であることから、「秀次本謡抄」編纂過程において『養老之注』を下賜（または書写を許可）された可能性を示唆する。また、見出し詞章について『養老之注』が上下両系混在する形である点から、従来の下掛り説を再考。再編本『謡抄』も混在であることや、『言経卿記』の記事から「秀次本謡抄」も清書の段階にあって混在だったと指摘する。

西村聡「『謡曲義解』五「卒都婆小町」―解題と翻刻―」（『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』8。3月）は、十二代藩主前田斉広（一七八二～一八二四）の晩年成立と推定される、注釈書『謡曲義解』（金沢市立玉川図書館近世史料館稼堂文庫蔵。11曲所収）のうち、記述が最も詳しい「卒都婆小町」の翻刻を紹介し、注釈史上の『謡曲義解』の存在意義を検討する。語釈・典拠に加えて、鈴木正三による改作「面影小町」、「秀」なる人物による改作「有明小町」を列記する点が『謡曲義解』「卒都婆小町」の特徴で、本来の主題とずれた改作も見られるものの「現代の作品研究の水

準で裁断するより、現代人には思いがけない角度から再検討が可能になる、その契機として活用すべき注釈書」とする。

つづいて、近代の能楽史関係資料を扱った論考を挙げる。国立能楽堂調査資料係「川﨑千虎能楽関係画稿」（『国立能楽堂調査研究』10。3月）は、明治画壇の重鎮であった川﨑千虎（一八三六～一九〇二）が描いた翁・千歳・杜若・竹生島の画稿を紹介（千虎の曾孫で日本画家の川﨑鈴彦氏よりの寄贈）。口絵には写真が数点掲載されている。

関屋俊彦「新蔵生田文庫所蔵『大西閑雪会員名簿』について」（『国文学（関西大学）』100。5月）は、観世流の大西閑雪の素人弟子であった生田家でまとめられた閑雪社中の抜粋名簿の翻刻紹介（生田秀の曽孫秀昭氏よりの寄贈）。明治37～38年にかけての記録で、秀の息子である耕一が筆録者と推定されている。また、関屋には「下田文庫所蔵『謡曲八百番目録福王盛充奥書』の紹介」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10）もある。大阪の廻船問屋「鍋屋」を営む下田家は、四代目治兵衛が観世流の橋岡雅雪に謡を習い、孫の益三が能楽師となった。その益三が、大正7・9年に書写した福王盛充奥書八百番謡本の曲目の翻刻紹介。

初代梅若実資料研究会「梅若六郎家蔵『伝授免状扣・第二』翻刻」（『能楽資料センター紀要』27。3月）は、前号に引き続いての翻刻紹介で、明治31年10月から明治40年12月の期間に梅若実が素人弟子へ発行した免状の記録。このほか『能楽資料センター紀要』27号には、寄贈を受けた近代の能楽資料二点の紹介が掲載されている。ひとつめは、別府真理子「山本東次郎家旧蔵「軍資義捐勧進能」関係資料」で、明治27年1月に芝能楽堂で催された日清戦争軍資義捐勧進能の主意書や各種帳簿など14点の書誌を紹介。もう一点は、羽田昶「江本知子氏旧蔵　金春流演能写真」で、櫻間金太郎（弓川）に師事したらしい江本義数（微生物学者。学習院大学名誉教授）撮影の、細川家能楽堂で催された昭和10年代の金春会の演能写真一五〇〇葉についての紹介がある。

長田あかね「江崎家旧蔵資料横山杣人より江崎欽次朗直康あて書簡・葉書十四通（上）」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10）は、昭和14～17年の六通の書誌と翻刻が掲載されている。両人の親交とともに、当時の関西能楽界が垣間見られ貴重。

この年は、能舞台・能楽堂に関する論考が多数みられた。まずは『国立能楽堂調査研究』10号（3月）から二本。山内麻衣子「国立能楽堂蔵「波吉家伝来能舞台建築関係資料」について」は、加賀前田家の能大夫波吉家に伝わった能舞台に関する21点の資料解題（粟谷能夫氏より寄贈）で、波吉家において能舞台を新築する際に参考資料として蒐集したものと推定されている。国立能楽堂調査資料係「製作報告 一橋徳川邸復元模型について」は、平成27年度国立能楽堂特別展示「一橋徳川家の能」のために製作された復元模型に関する報告。絵図面・絵画・写真資料に基づき、江戸後期の一橋徳川邸を復元する過程が詳しく紹介されている。典拠資料の図版も多

く掲出されており有用。

宮本圭造「伏見稲荷大社御旅所の能舞台―幕末期の能番組を紹介して―」（『朱』59。3月）は、神戸女子大学古典芸能センター伊藤正義文庫蔵「幕末明治京都等能番組集」の中に含まれる伏見稲荷大社御旅所の番組によって、能舞台の創建が嘉永三年であると明らかにし、後継者選びを模索する金剛流野村三次郎の動向等を紐解く。巻末には、考察に用いた20点の番組を翻刻、併せて前西芳雄「京都南陽舎番組」（『金剛』89～99号、昭和49～52年）からも番組を転載紹介されており、伏見稲荷大社御旅所の番組を一覧できる。

大山範子「神戸湊川能楽堂略史（二）―大正～昭和初期の神戸―」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10）は、大西（手塚）亮太郎が設立した湊川能楽堂の全盛期（大正7・8年）から終焉（昭和10年）までを取り上げる。能楽堂設立の経緯と設立者について述べた同8号に続く内容。能舞台への女性の進出、ラジオ・レコード・学生鑑賞能による能の大衆化など、湊川能楽堂を主軸に神戸の能界の当時の状況を考証する。

辻槙一郎「新出史料・靖國神社能楽堂の図面史料について」（『楽劇学』23。3月）は、靖國神社偕行文庫館蔵の図面史料に基づき、明治35～38年、大正13年、昭和12年の三期の改修内容を比較・検討する。貴賓用と一般用の入口の位置に着目し、その外観の変遷から、「皇族をはじめとする上流階級の重要性、そして皇太后への御孝養の場であったというコンテクストが、改修を重ねていく中で稀薄化する過程」を読み取る。

大江新「能をとりまく建築（四～六〔最終回〕）」（『観世』1・3・5月）は、建築家の専門的な視点で、能舞台・能楽堂をめぐる諸事を噛み砕いて解説されている。「（四）古い舞台と新しい器」は能舞台の移築によって生まれる新しい能楽堂について。「（五）見所のつくり」は座席の変化（桟敷から椅子へ）、座席数、見所の勾配、中正面の座席配置等、見所にほどこされた工夫を紹介。「（六）能楽堂あれこれ」は筆者と、筆者の父である大江宏が関わった規模の異なる能楽堂五つ（梅若能楽学院・銀座能楽堂・横浜能楽堂・名古屋能楽堂・金剛能楽堂）を取り上げ、舞台と見所以外の空間を比較。そのほかユニークな作例として、厳島神社・登米市伝統芸能伝承館・岡崎城二の丸能楽堂・旅館あさば・セルリアンタワー能楽堂を紹介。

最後に、月刊『観世』の見返しで連載中の「観世文庫の文書」82～93の書名と執筆者は次の通り。「寛文二年六月九日付興福寺宛奈良奉行書状」天野文雄、「観世宗節筆謡本『白主』」高橋悠介、「真観印こぼし」長田あかね、「観世正宗極并伝来書」中尾薫、「観世大夫宛唐橋在綱書状」鵜澤瑞希、「移之譜（替之譜）」高桑いづみ、「飾式」伊海孝充、「御当家細川家御代々次第」小川剛生、「『板敷山』型付」横山太郎、「二人獅々之事」橋場夕佳、「型付」柳瀬千穂、「大倉流一調『龍田川辺』」恵阪悟。また、『語文』154号（3月）の辻勝美・

金子馨「日本大学文理学部所蔵謡本目録―附小謡本目録補遺―」には、謡本77点と「小謡本目録」（『語文』152）の補遺3点の解題がある。（深澤）

【能楽論研究】

能楽論に関する論文は、この年も少なかった。まず、上野太祐「世阿弥と『毛詩』をつなぐもの―『音曲口伝』第六条の「正しき」をめぐって」（『書物・出版と社会変容』20、3月）は、『音曲口伝』第六条が『毛詩』大序の「得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは」を引用し、これを「正しき感」と関係付ける点について、清原宣賢の『毛詩聴塵』において詩の本質に「誠」や「正直」といった価値が強調されている点に着目し、世阿弥が清家系解釈の影響下にある『毛詩』解釈を引いたと想定する。また、それは『三流抄』が歌を愛する鬼神を「心直ナル者」とする価値観とも通じているという。そして、世阿弥の「無文」評価が、二条良基の連歌論の「有文」「無文」評価と逆転している点にも、「正は無文なり」として、『毛詩』解釈と関わる「正しき」という価値と「無文」とを繋げていることが関わっているとする。

同じく『音曲口伝』に関しては、中西紗織「世阿弥の伝書に見える「声」に関する一考察（3）『音曲口伝』における声の使い方」（『北海道教育大学紀要．教育科学編 67（1）』、6月）がある。『音曲口伝』について、発声法、声の使い方・作り方という観点から整理し、同書にみえる音曲の習道を観世寿夫の発声論とも関わらせて論じているが、『音曲口伝』自体の分析という点では物足りない点を感じた。

岩崎雅彦「「いたづらに咲き匂ふ」花の系譜」（『鋟仙』656、3月）は、『風姿花伝』第三問答条々の第四項の「人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎の花・藪梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし」という表現を、和歌における「いたづらに咲く」趣向の詠み方の中に位置づけたもの。「田舎の花」「藪梅」という和歌では使われない言葉を「いたづらに咲く」という伝統的和歌表現と組み合わせた効果を論じている。

原田香織「世阿弥伝書における禅的な表現」（『文学論藻』90、2月）は、『風姿花伝』にみえる「公案」の用例十五箇所を挙げ、世阿弥伝書において「妙」という概念がどのように展開しているかをたどり、『拾玉得花』における天岩戸神話の記事の「微笑」を、釈迦から迦葉への「以心伝心」の伝授を物語る「拈華微笑」と関係づけている。

その他、能楽論研究の一部は、次項【能楽と宗教】で紹介したので、合わせて参照されたい。

【能楽と宗教】

『能と狂言』14（9月）には、前年6月の能楽学会大会シンポジウム「能の宗教的環境」の内容が掲載された。伊藤聡「中世神道と能」、末木文美士「中世思想の転回と能」、高橋悠介「能の亡霊と魂魄」、松岡心平「翁の宗教的性格：荒神としての父尉」の四本に加え、シンポジウムを企画した落合

博志による概要報告「能の宗教的環境―大会企画について」と全体討議も収録している。

伊藤論文は、まず伊藤正義の提唱した「中世日本紀」論が、能楽研究のみならず中世神道研究・日本史研究・思想史研究などに及ぼした影響について、その前後の研究状況の中から改めてその意義を概観した後、〈逆矛〉〈龍田〉にみえる瀧祭神の問題、〈淡路〉にみえる「種蒔く、種収む」の語句の問題、〈三輪〉と三輪流神道の問題を取り上げる。まず伊勢の逆矛をめぐる秘説の展開として、逆矛が収められたのは『倭姫命世紀』以下、酒殿とする説が主流だったのに対し、『大和葛城宝山記』に「宝杵」（逆矛）が瀧祭神に納められているという説が登場し、こうした瀧祭神説を受けて、度会家行が『類聚神祇本源』で瀧祭と広瀬龍田を一体であるとし、それが北畠親房を経由して能に流れ込んだという経緯を想定する。また、〈淡路〉の「種蒔く、種収む」については、中世神道説から『三流抄』『玉伝深秘巻』等の古今注の説が生じたというよりは、古今注で登場した新たな説が中世神道書に取り込まれた側面が強いことを指摘する。さらに〈三輪〉の背景の一つにある三輪の慶円上人説話の展開について、当初は慶円が室生の善女龍王に伝授する話が、慶円と三輪明神との話に変化し、さらにお互いに伝授する互為灌頂の要素が加わるという経緯を想定する。

末木論文は、中世の思想史を、現世的な「顕」の領域と、その裏側にある不可知で見えざるものたちの「冥」の領域の関係から捉える中で、能を位置づける内容。中世後期から近世にかけては「冥」の領域が消えて世俗化するように捉えられがちだが、そうではなくて「冥」の領域が「顕」の領域に顕現して、統御不可能だった世界が可視化され統御可能になっていくような過程を想定し、修羅物の亡霊の後シテは「冥」であるのに対し、前シテとワキは「顕」と「冥」の境界に位置するという。また、真福寺の逸題書にみえる無住による円爾の講義聞書などを例に、禅が密教的なものに織り合わせられながら、その中に最高のものとして位置づけられていく思想史の流れを、六輪一露説とも関連づけて論じている。さらに、『暮帰絵詞』の中に、「頻婆娑羅王・韋提夫人・阿闍世太子」等の振る舞いについて、方便として「猿楽」をして邪見の群衆を化度しようと位置づける一節があることに注目し、猿楽は一見、「顕」の世界でのやり取りにみえて、奥には仏という「冥」の力で操られているという脈絡があること、軍記でも『太平記』の中では「顕」の世界に出現した「冥」を様々な形で統御できるような術が形成されており、能の形成にもそうした時代背景があるという。

高橋論文は、能の亡霊に魂と魄の二元的な性格があることを分析したもの。能には異常死を遂げた人の亡霊に限らず、様々な亡霊が登場するが、それが当時の亡霊観を反映していることを、称名寺の湛睿説草『恩愛紲難断事』にみえる、極楽往生した人の魄霊が恩愛によって登場する説話の例などをもとに指摘した。また、能に魄霊に関わる「草の蔭」という

表現が登場する理由や、「あら閻浮恋しや」という定型句の背景、能の亡霊の多くが怖い亡霊ではない理由、元雅と禅竹が魂魄を描く際に打ち出した新趣向などについても言及した。

松岡論文は、能の翁の父尉の古態の詞章の分析から、翁の宗教的性格を考察するもの。天野文雄は、延命冠者が釈迦に相当する一方、父尉は、その延命冠者が父という浄飯大王に相当し、〈翁〉の場は天竺舎衛城であるとするが、これに対して、父尉の語りの中に、天地開闢以来の翁であると素性を明かしていることとの矛盾を指摘する。そして『荒神縁起事』において、世界成国以来の存在で「仏兄」と呼ばれる荒神が、翁と関わる神観念であるという立場から、父尉が浄飯大王であるという語りは、釈迦という仏に先行するのが父尉であるということだけがポイントで、家族関係やインドの地とはほとんど無関係の言説だと論じる。また、真福寺の『三種神祇并神道秘密』の第六天魔王譚において、魔王と荒神が重ねあわされ根源神・原初神的な性格、大地霊的な性格を付与され、また神・仏を越える審級として、神・仏を調停し安定させる役割を果たしており、翁の宗教的性格を考える上で、こうした荒神の性格に着目している。なお、『荒神縁起事』については、薬樹院の近世写本が引用されているが、『巡礼記研究』8に、正和5年の本奥書を持つ中世写本を翻刻し主要三伝本との校異を示した拙稿があり、引用部分にも多少、解釈に関わる異同があることを付け加えたい。

全体討議では、パネリスト同士の討議に加え、当日の司会の落合博志も、『法華五部九巻書』に人間の幽霊が出てくる能を前提としたような表現が見えることを指摘する。また、永徳三年（一三八三）に書写山で書写された国文学研究資料館本が同書の現存最古写本である一方、書写山出身の慈遍が元弘三年（一三三三）に撰述した神祇書『天地神祇審鎮要記』に「猿楽」に関する言及があることを指摘し、書写山と猿楽との関係についても注意を促している。能の宗教的な背景については、興味深い問題が多く存在し、今後も研究の余地が大きいことを実感させる特集であった。

また、『禅文化』241（7月）は、「禅と能」という特集を組んでいる。相国寺管長・有馬頼底と観世宗家の対談（聞き手・土屋恵一郎）の他、天野文雄「世阿弥の芸道思想と禅―『花鏡』の「一行三昧」をめぐって」、松岡心平「一休と能」、田邊宗一「薪の里に集いし人々―芸能の転換期と一休禅師」、伊庭貞一「能面師から見た禅と能」の四本が掲載されている。対談では、坐ること・呼吸・何もしない美しさ・役に成りきることなどをめぐって、能と禅の世界の共通点が闊達に語られている。また、酬恩庵一休寺住職の田邊宗一が、酬恩庵の沿革をたどって一休や禅竹の性格を紹介し、能面作家の伊庭貞一が、能の運びと禅堂における経行の歩き方に近いものを感じることなどを書いており、様々な視点から「禅と能」というテーマを探求した特集となっている。

このうち、天野論文は、『花鏡』に師たる者の位に必要な三点の一つに挙げられる「一行三昧」が、『六祖壇経』にお

いては「行住坐臥」に行うことを要件として出ている言葉であり、それが『花鏡』の「万能を一心に綰ぐ事」の中で「日々夜々、行住坐臥に、この心を忘れずして、定心に綰ぐべし」とみえる文脈とも連関していること、世阿弥能楽論に他に三例みえる「定心」も本来は禅定心を意味し、「一行三昧」に込められていた行住坐臥・不断の工夫・努力という考え方が世阿弥の習道論でそれなりの一を占めていたことを指摘する。

また、松岡論文は、「禅竹と一休―禅竹の名の由来について」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』97)を再説する形で、禅竹と一休の関係を論じている。『猿楽縁起』の奥書にみえる多福庵・禅竹という名について、禅竹が一休に師事したいために薪を隠居地として選んだ際に付けたか、一休に付けてもらった名であるとし、一休が中国の禅僧香厳智閑と多福和尚の竹の故事をふまえた詩を作り、自らの庵にもこれにちなんで竹を植えていることなどを、その背景として挙げる。また、一休が禅竹に与えたという伝承を持つ能〈江口〉に関わる法語について、一休が禅竹の謡った、もしくは演じた〈江口〉のクセに触発された七言絶句を作り、その後、禅竹から取り寄せたクセの後半分を自分で漢文に直訳して冒頭に挙げ、以前の七言絶句と奥書を加えて禅竹に与えた、という成立過程を想定した上で、『狂雲集』の中からその文脈を読解する。(高橋)

【能楽史研究】

以下、能楽史を扱った論文を時代順に紹介する。この年は室町時代の能楽史に関する論文が多かった。天野文雄「佐渡と世阿弥――『配流の理由』『佐渡での生活』『帰還の成否』についての再考」(『民族芸術』32)は、これまでの佐渡と世阿弥をめぐる研究史をまとめて整理し、著者の見解を示した論考。世阿弥配流の理由を、謹慎中の日野中納言義資邸へ世阿弥が祝賀に参上したためと捉え、佐渡での生活は中世の囚人預け置き慣行に従って遇され、あまり制約のない自由な生活を送っていたこと、永享八年二月を隔たらない頃に佐渡から帰還できたと考えられることを、『金島書』に見られる世阿弥の心境や禅竹周辺資料等から論証している。

同じく天野文雄「二人の三郎――世阿弥と音阿弥でたどる能楽史――」(『学士会会報』919。3月)は、世阿弥と音阿弥の芸風の違いに関する論考。両者の後継者問題と確執について整理した上で、幽玄な夢幻能を理想とした世阿弥に対し、音阿弥はその対極にある多武峰様の演出や将軍義教の好みに合う演目を演じていることに着目、信光・長俊・禅鳳に代表される室町後期の風流能の出現は音阿弥をターニングポイントとして出現したと分析している。

吉川周平「松囃子と能の式楽化」(『国立能楽堂』389。1月)は、永享年間に観世が室町御所でつとめた松囃子の内容を『申楽談儀』等から読み解きつつ、熊本県菊池市に伝存す

る「菊池の松囃子」がそれに近い可能性を指摘する。これは中世の豪族菊池武光に起源を持つとされる菊池の松囃子の伝承に訂正を促すもので、その根拠として吉川氏は、『似蛾与左衛門国広太鼓伝書』に見える松囃子の詞章が「菊池の松囃子」に極似していること、太鼓伝書の詞章が室町幕府の松囃子を伝えていると見られることを挙げる。

宮本圭造「面打井関考」（『能楽研究』40。3月）は、面打井関の歴代に関する論文。まず享禄元年の作と思われる土佐神社の尉面によって井関上総守親信の実存を確認、井関が近江北郡の有力な郷士で、「井関上総」がその一党を代表する地位にあった事実を詳らかにする。次に鞍打井関家の史料をもとに、井関親信の後を息子次郎左衛門家政と親政が継いだこと、親信四男の大光坊幸賢は、大吉寺西之坊に住して恵鎮・恵久法印・井関明息斎を名乗り、大光三代は面裏に共通点が認められることを指摘する。時代が下ると、戦国期に井関備中守次之介、慶長期に井関備中守家久が活躍したことを実作例から立証し、井関家久は元浅井氏の家臣で、浅井氏没落後に近江海津西浜村に蟄居したことを明らかにしている。また名人と讃えられる井関河内について、寛永頃に近江から江戸へと活動の場を移し、江戸で幕府御用面打としての地位を確立した後に京都で晩年を過ごしたこと、井関河内の後は多くが医者に転じたこと等を紹介している。さらに『能面切型図』に基づいて、井関の工房では切型を用いた精巧な写しの技術が早くに確立されていた可能性に言及している。

同じく宮本圭造「笛役者伊藤安中伝」（『国立能楽堂調査研究』10。3月）は、安土桃山時代の笛役者伊藤安中についての論考。伊藤安中が織田信長から領地を賜り、商人司の地位を保証されるなどの庇護を受けるとともに、信長関連の能に出演し、織田信雄に仕え、豊臣政権期には秀吉・秀次主催の能に大いに活躍したこと、縁者に柴田勝家や黒田如水がいることから、安中が大名に准ずる身分と見なされていたこと等を詳らかにしている。

また月刊『観世』は、宮本圭造「徳川家康の政治戦略と能」を連載した。「①『作り馬鹿』をする家康」（5月）は、秀吉時代に徳川家康が義経の役を不調法に演じて見物人を大笑いさせたが、一部の大名はそれが「作り馬鹿」であること見抜いていたという逸話を紹介。豊臣政権下で家康が鬘物を多く舞っていることも、「ふとりたる老人」に似合わぬ役柄で道化の役回りに徹し、秀吉を油断させる意図があったかと分析する。また文禄禁中能で秀吉と前田利家・徳川家康が狂言「耳引」を演じたのは、家康の発案かとも推測している。「②桶狭間の合戦後の十二年」（7月）は、桶狭間の合戦後における越智観世と家康の動きについて。駿府滞在時の家康周辺には越智観世十郎をはじめとする能役者が集っていたが、桶狭間の合戦後、観世十郎は今川氏真とともに小田原で北条氏康の庇護を受け、流浪の後再び家康の庇護を仰いだこと、謡初の創始に室町幕府同朋衆の文次軒考阿弥が関わっていたこと等に言及する。「③和談の末の勧進能」（9月）は、家康

が武田を破って領国を支配下に収めるための道のりと、それに関連する能について。家康が天正十四年の浜松城における婚礼祝儀でシテを勤め、北条氏の宴席でも舞を披露していることを交戦の意志がないことのアピールと分析。同年には観世身愛に勧進能を命じているが、それは家康が勢力を拡大して得た三河・駿河・甲斐の各地で行われており、身愛の稽古と領内へのお披露目という目的とともに、領内の安定と領民の掌握という政治的な意図が見え隠れするとしている。「④家康所持の『風姿花伝』の行方」（『観世』、11月）は、家康が所持した世阿弥伝書について。家康が『風姿花伝』の所持に至った背景として、山科言経や冷泉為満を召し抱えて古本蒐書活動を行ったことや、駿河の観世十郎大夫が遠江移住に際して越智観世家伝来の能伝書を献上したことを挙げ、それを観世宗節・元尚（もとひさ）父子が書写していることを紹介。細川幽斎が家康から世阿弥伝書を借り受け、伊藤安中が権威づけのために『八帖花伝書』を越智観世家伝来としたことや、慶長末頃に家康によって世阿弥伝書の写本が作られた可能性を指摘している。

続いて近世能楽史について。延広由美子「研究ノート　徳川秀忠と小鼓」（『東海能楽研究会年報』20。3月）は、青年期から小鼓を打っていた徳川秀忠が、家康没後は自制して打たなくなった逸話を紹介。四座を政権下に取り込みつつ、主催者かつ客として能を楽しみ利用したことは秀忠の自制的な性格の表れであり、喜多流の成立もその流れに沿ったものと評価している。

西村聡「『太梁公日記』から見た加賀藩能楽事情―明和末・安永初期の重教と治脩を比較して―」（『加賀藩研究を切り拓く：長山直治氏追悼論集』。7月）は、加賀藩十一代藩主前田治脩（はるなが）が記した『太梁公日記』から、能の稽古や御手役者召し抱えの経緯、老中招請能に向けた準備や番組等の記事を示し、『加賀藩史料』記載の記事では知り得なかった前田重教と治脩の能楽享受の様子を明らかにしている。

佐藤和道「鴻山文庫蔵『乱舞帳』人物考察」（『東海能楽研究会年報』20。3月）は、平井半左衛門筆『乱舞帳』に記載された人物の一覧。弘化・嘉永期における尾張藩士の稽古や出演の様子を知ることが出来る資料に基づき、各人の流儀・役藉・家禄・職藉等を詳らかにしている。

また、近世の謡本に関する研究に、伊海孝充「玉屋謡本の研究（二）―「玉屋謡本系」という系統をめぐって―」（『能楽研究』40。3月）。江戸時代初期観世流謡本の中における玉屋謡本と光悦謡本・元和卯月本の関係についての考察で、古活字の古玉屋本は光悦本系の謡本であること、整版の整玉屋本に独自性を認めることはできるが、玉屋謡本系という系統を想定する必要はないことを明らかにしている。その理由は、光悦本と卯月本に詞章の性格が決定的に異なるほどの乖離があるわけではなく、整玉屋本の詞章は一系統として後代の謡本に引き継がれているわけではないこと、整玉屋本のように光悦本と卯月本の中間的な性格をもつ謡本はほかにも存在す

ることにあるという。従来、玉屋謡本は光悦本と元和卯月本の中間的性質で、文句は光悦謡本に近いとされてきたが、そのような捉え方に再考を促す論となっている。

続いて近代能楽史。この年は近代を扱った論文も多かった。宮本圭造「神仏分離と南都両神事能―春日大社の翁舞はどう変わったか―」（『国立能楽堂第』392。4月）は、幕末の神仏分離政策が南都両神事の翁舞に与えた影響に関する論考。室町期に四座立合だった翁舞が金春座のみの現行形式となったことについて、神仏分離・廃仏毀釈・境内上知令といった維新の混乱で寺社が財政基盤を失った背景があることを指摘。明治四年の両神事能中止後、明治九年に若宮御祭、同十三年に薪能が再興されたが、薪能の復活が遅れたのは、もともと薪能が興福寺修二会に付随する行事で、神仏習合の影響を受けて春日社でも翁舞が行われるようになった経緯があるためとする。明治期にはそうした仏教色を排除するため、興福寺と春日社は薪能の主催者に加わらず、神仏習合の象徴である「呪師走りの翁」は廃止、若宮御祭でも「弓矢立合」の文句から仏語が削除されたという。また若宮御祭の維持に努めたのが金春広成で、金春家の人々が「春日御能役者」として薪能・若宮御祭に関わり続けたことが、両神事の伝統を今に伝える要因となったと評価している。

奥山けい子「明治後期における熊本の能楽―1903年―5年の公演にみる―」（『お茶の水音楽論集』18。4月）は、雑誌『能楽』の記事に基づいて1903年から1905年に熊本で行われた能公演の日時や演目を紹介した論文。その出演者の経歴を詳らかにすることで、熊本の能楽師が西日本全体を活動圏としたことや、熊本と東京の頻繁な交流の結果、能楽伝承の中枢となる役者が熊本から供給された実態を明らかにしている。

中嶋謙昌「もう一つの大典能―大正大礼の京都における天覧能の頓挫―」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10。6月）は、大正四年十一月に京都西本願寺で開催された京都大礼奉祝会主催の大礼奉祝能楽についての論考。大正天皇の即位を祝う大典能が皇居内だけでなく京都でも行われたことや、主催者たちが二条離宮における大饗での天覧能上演を期待していたが認められず、大礼関連行事としての上演は頓挫したこと、代わりに西本願寺南舞台で上演された能の番組や観客などを紹介し、当時の式楽観の変化についても触れている。

飯塚恵理人「ラジオ放送と蓄音機レコードが変えた謡曲の質―囃子方にシテが合わせる時代へ」（『椙山女学園大学文化情報学部紀要』15。9月）は、マスメディアが伝統芸能の質を変えた一例として、ラジオやレコードによる謡曲教材の普及を挙げ、それが名人の地方進出と謡い方の統一を招いたと指摘。その上で、SPレコードコレクター辻山幸一氏が所蔵する謡曲レコードの分析から、能楽は明治から昭和三十年代前半までに、大鼓や小鼓が謡に合わせるという形式から、囃子に合わせて謡が謡う形に変化していく傾向があったことを

明らかにしている。

佐藤和道「国語教科書と能楽」（『能と狂言』14。9月）は、戦前の中等教育機関において能が教材化されていく過程についての考察。まず、明治三十一年の「尋常中学校教科細目調査報告」を嚆矢として戦前の中等教育機関における能の教材化が始まり、〈鉢木〉〈安宅〉〈七騎落〉等が旧制中学校でより多く取り上げられたことを明示。その背景には、作品内容と忠君愛国的な教育思想との合致があると分析する。また良妻賢母が教育目的とされた明治期高等女学校においては、〈羽衣〉〈小袖曽我〉〈鉢木〉が教科書に採録され、大正・昭和と進むにつれて〈隅田川〉が急増して定番教材となったことを当時の教授資料によって裏付け、その背景には大正期における母性の強調があると推測した。なかでも戦後の人気曲〈隅田川〉は「教科書が能のカノン形成に影響を及ぼした最も典型的な事例」であるという。また昭和期には学生鑑賞能や学生サークル等の形で能が教育現場へ進出し、このことが戦後の享受層拡大と復興の一役を担ったと考察している。

最後に、美術史に関わる論考として、以下の四本がある。月刊『観世』は「琳派と能」という特集を組み、天野文雄「乾山作の『色絵能絵皿』について」（1月）、宮本圭造「能役者になったかも知れない尾形光琳」（2月）を掲載した。天野稿は、伝存する五つの尾形乾山作『色絵能絵皿』を紹介し、出光美術館所蔵の絵皿は二条家を介して加賀前田家周辺の所蔵となった蓋然性が高いこと、描かれた能番組の曲名や詞章は上掛りであり、このことは喜多流の傘下に入りつつあった渋谷の芸系が、光琳・乾山時代には上掛り系だったことを物語ると分析している。

宮本稿は、尾形光琳を取り巻く能の環境について。光琳・光悦に代表される尾形家と本阿弥家は血縁姻戚と日蓮宗によって結ばれており、その周辺に信仰をともにする小畠や渋谷等の能役者がいたこと、同様の事例は俵屋宗達の一族として有力視される蓮池家と喜多川家にも見られ、京都の呉服屋には能を嗜みセミプロの能役者として活躍するものが少なくなかったことを明示する。それは町人達が能芸を活かして諸大名の扶持に有り付こうとしたためであり、光琳と能との関わりは当時の呉服商に一般的な現象であるとした上で、光琳も少年期から禁裏能大夫小畠左近衛門のもとで能の稽古を受け、観世重清の勧進能では松平家一門とともに見物をしていたことを紹介している。

三宅晶子「研究十二月往来〈337〉「光琳かるた」の絵を読む—高砂の松など—」（『銕仙』654。1月）は、尾形光琳筆とされる「光琳かるた」の絵柄から、どのように百人一首の歌が解釈されていたかを読み解いたもの。藤原興風「誰をかも」の取り札に夫婦松が描かれているのは能〈高砂〉の影響であり、能が江戸文化と密接に関わっていた一例と捉えている。

清水玲子「近代美術と能」（『国立能楽堂』390。2月）は、能が近代美術においてどのように描かれたかを考察したもの。下村観山「弱法師」、菱田春草「菊慈道」、小林古径「楊貴

妃」、上村松園「砧」が描かれた背景や当時の画壇について紹介し、近代美術における能が「次の時代の美術を探求する中で辿り着いた新しき主題として描かれた」と分析している。（小室）

【作品研究】

本年に発表された作品研究を伊海・山中で分担して展望する。『能と狂言』の特集と『観世』は伊海が、『鉄仙』『国立能楽堂』パンフレットは山中がまとめて担当している。

『能と狂言』（14。9月）には世阿弥忌研究セミナーのシンポジウム「世阿弥から禅竹」の報告がテーマ研究として所収されている。金春康之「演者からみた世阿弥と禅竹、その作風」は《葛城》《熊野》《西行桜》を禅竹作と比定し、世阿弥がシテの情念に整合性をもたせ浮き彫りにする手法をとるのに対して、禅竹は美しい詩的世界を横に連なるように繋げていく手法をとると考え、《雲林院》からも禅竹的手法が看取されると指摘する。三宅晶子「禅竹のもたらした能の改革性」は、禅竹を能の類型化の主要な仕掛け人と捉え、彼の作能法を検討する論。主に夢現の境目の曖昧さ、舞の意味の曖昧さ、本説を明確に開陳しない手法に注目し、言葉を尽くして表現する世阿弥に対して、禅竹はなるべく想像させる手法をとると考える。両論とも、どの曲を禅竹作とするかという出発点から問題点を含んでいるが、禅竹の作品研究を進展させる上での有意義な問題提起となっている。また本テーマ研究には、能楽論研究である樹下文隆「世阿弥から禅竹への継承」も含まれているが、ここで言及する。本論は禅竹が世阿弥の芸術論をどのように継承したかを、申楽・猿楽起源説における神楽と翁、五音習道論の二点から考察する。世阿弥伝書と禅竹伝書は使用用語面から濃密な影響関係が見て取れるが、禅竹は世阿弥の芸の本質論に習道論を加味し、六輪一露説を結実させようとしたと推測する。

『観世』には観世信光没後五〇〇年を記念して、「華やかに、劇的に、観世信光の世界」という特集が組まれる。作品に関わる論考は四本。小田幸子「フィクションの追求―信光の能の魅力」（6月）は信光作品の演劇性を問う論考。まず《羅生門》などを例に、異類と人間が戦う能におけるワキの英雄造形の手法を考察する。また《舎利》からの影響を想定しつつシテの変身や場面の変化の重要性を指摘する。さらに《大蛇》などを例に、神話がもつ祝言性をそのまま利用する祝祭空間の描き方を論じる。もう論じ尽くされたテーマに思えたが、これまで個々に指摘されていた信光作品の特色を組み合わせ、一つの演劇の姿を浮かび上がらせようとする点に新しさを感じた。樹下文隆「〈安宅・道成寺〉が信光作でない理由」（7月）は論文名が示す通り、《安宅》《道成寺》の非信光作説の補強。《安宅》については、冒頭の道行の漢籍摂取態度や心情描写を反映した情景描写がない点、《道成寺〈鐘巻〉》については漢語と和語の混用、原詩の内容に沿わない漢詩の引用などの面から、信光作説を否定する。信光作説を訴える論考はよく

あるが、非信光作を主張する論は珍しい。長年信光の作品分析を継続してきた氏ならではの論である。なお、『観世』に掲載されたものではないが、同氏には信光の文化的素養を踏まえ作品の特色を述べた「信光作品の魅力」（『国立能楽堂』400。12月）もある。

再び『観世』の特集に戻る。作品研究ではないが、堀川貴司「五山文学における画賛」（8月）もここで紹介する。本論は「観世小次郎画像」と「宮増弥左衛門親賢画像」の賛の紹介と注解である。前者の「鸞膠次絃」を芸の継承、後者の「都曇答臘」を小鼓の音色と解釈するなど、新見を含む。松岡心平「「遊行柳」をめぐる断章―生命の循環と復興と―」（9月）は遊行上人と柳をめぐる伝承の考察。中世に広く流布した『一遍上人縁起絵』の白河の関の場面に記される他阿弥陀仏の西行への対抗意識と、その直前に描かれる柳の図が結びつき、信光が知り得た遊行柳伝説が形成したと考える。興味深い説であるが、『一遍上人縁起絵』を結びつけ、そう解釈したのか、すでに二つを結びつけた説が流布していたのか。もし前者なら、信光の作能法を考える上でも重要である。丸茂祐佳「信光の能の舞踊化―《船弁慶》と《紅葉狩》―」（11月）は信光の能とそれを摂取した歌舞伎舞踊との比較。能の詞章に拠るところが多い舞踊《船弁慶》は、舞踊場面を挿入するだけでなく、登場人物の心理を写実的に描写するなどの工夫が見え、能からほとんど詞章を借用しない舞踊《紅葉狩》は、作者・黙阿弥の苦心が見えるものの、「能の歌舞伎化に過ぎなかった」と考える。また、作品研究から少し離れるが、信光作品の上演頻度、現在における《船弁慶》の演出、ワキの活躍が多いがゆえの信光作品上演の難しさなどに言及する金子直樹「現代における信光作品」（10月）もある。

篠山能楽資料館誌『紫明』（39。9月）は開館四十周年記念号。作品研究は二本掲載される。味方健「ほろびの美学―金春禅竹の一つの世界―」は《芭蕉》の作品研究。シテの［次第］［サシ］に見える「破る」「破窓」「疎屋」などに注目し、「ばうをく」に通ずるイメージが曲の「屋台骨」となっているほろびの抒情詩として読む。一読した時は感覚的な解釈という印象を受けたが、禅竹作品は彼自身のイメージの連鎖を掬い取ることこそが大切なのでは、と考えさせられた。大谷節子「「小袖曽我」の小袖」は詞章には見えない「小袖」を曲名に冠する疑問の追究。大西家『直恒聞書』や狂言方資料に拠り、江戸時代後期に見える初同の謡の後、狂言方がシテへ小袖を渡す演出が、成立当初からあったと推測する。首肯すべき説だろう。

その他の作品研究・演出研究は以下のとおり。

重田みち「「夢幻能」概念の再考―世阿弥とその周辺の能作者による幽霊能の劇構造―」（『人文学報（京都大学）』109。2月）は、現在では当たり前のように使われている「夢幻能」という言葉を解体し、新たな概念で捉え直そうとする論。長大な論のため定義の詳細な説明は割愛させていただくと、

「現能」「夢能」「半夢能」などの用語を用い、能の宗教性の変化、質的変化に合わせ、劇構造の変化の把捉を目指し、総称としては「幽霊能」がふさわしいと提起する。夢幻能の捉え直しは今後の研究において必要になるはずなので、能作史を再考しつつ、重田説を読み直してみたい。同氏には他に、世阿弥伝書に見える《融（塩竈）》等の記述が「舞台藝能」ではなく、「座敷謡」のことであると主張する「世阿弥伝書の謡に関する記述の読みかた―《融》《関寺小町》《松風》《雲林院》の作能をめぐる私見―」（『銕仙』658。5月）がある。《融》の一部と考えられてきた《塩釜》の謡には役名表記がないこと、《松風》については『申楽談儀』の記述が謡のことに終始していることなどを根拠にあげる。

山中玲子「能〈通小町〉遡源」（『国語と国文学』93-3。3月）は《通小町》の解釈をとおして、古態の姿を探る論。上掛リの「いかなる人ぞと名を尋ねばや」というワキの問いに対して、ツレが「木の実の数々…」と木の実の名前を尋ねるのは、本来ワキが「御身の名を聞かせ候へ」と問うていたのに対して、ツレはそれをはぐらかし、言葉遊びのように「身」を「実」にずらしたためと読み、さらに木の実尽くしの［ロンギ］を繋げるため、世阿弥が［サシ］を追補したと考える。また様々な解釈や改作説がある終曲部について、九十九日目で死んだ少将にとって百日目は現実ではなく、僧の助力によって用意されたフィクションと読み、邪淫の罪の少将と妄語の罪の小町が、飲酒戒を保持することで救われるという唱導劇として読む。興味深い解釈を示すだけでなく、本曲の大部分が観阿弥時代までに完成していたことを主張する論で、《通小町》の改作論争に一石を投じている。同氏「能の「習事」と番組上の小字注記―「小書」という語の意味するところ」（『能楽研究』40。3月）は、現在「習いの替演出」を指す「小書」という言葉の歴史的変遷を考察する論。「小書（き）」という記述は、文化・文政ごろから見えるが、番組に記載された「小書き」は観客に特別な演じ方を知らせるための注記で、役者同士が理解している習事の内実ではないこと、「触流し」などの役人周辺で用いられる、文字通り「小さく書く」と意味合いが強い言葉であったこと、今日の用法は明治時代になり池内信嘉や雑誌『能楽』周辺で用いられるようになったことを指摘する。前号の研究展望の山中稿［「小書」の呼称と池内信嘉」の評の中で、「いつどこで「小書」という言い方が生まれたかも気になった」と書いたが、その答えは本稿の中にあった。

小田幸子「夢幻能の時制―ワキの役割を中心に」（『Theatre Arts』60。4月）はワキの人物像から夢幻能が描く時間を考察する。ワキが固有名詞をもち、時間がシテの死後まもなくに設定されていることが多い能をA型、ワキを諸国一見の僧などとし、時間を定めずシテの没年よりかなりの隔たりのある能をB型とし、後者の空間・時間の永遠性・可変性を指摘する。ワキの役割を再考するという点だけでなく、前掲重田稿が論じた夢幻能の考え方への問題提起となっているという

点で重要であろう。（以上、伊海）

『国立能楽堂』各号の「特集」は、前述の樹下文隆「信光作品の魅力」のほか、石黒吉次郎「能「誓願寺」と和泉式部」（391。3月）、竹居明男「天神信仰と日本文化―能「菅丞相」にちなんで―」（393。5月）、渡辺秀夫「虚実の交響／求心と変容―小町的なるもの」（397。9月）の三本が作品研究的な内容。石黒稿は誓願寺の歴史と和泉式部にまつわる説話・伝説に触れる。竹居稿は、菅原道真の履歴から始め、天神信仰の成立と広がりを説く。渡辺稿は、小町像形成の核となる『古今集』収載歌と真名序・仮名序における小町評からスタートし、好色、驕慢、老残等のイメージが形成されていく過程を示す。また、国立能楽堂特別企画公演「復興と文化・特別編―老女の祈り―」のパンフレット「復曲能　名取ノ老女」（3月）には、上演詞章や上演台本に関する解説のほか、小田幸子「神と人との物語―「名取の老女」作風と現代性」、小林健二「「名取ノ老女」成立の背景」、佐藤弘夫「浄土に誘う神」等、作品分析や背景に関する小論が載る。

『鍐仙』の「研究十二月往来」には、前半で取り上げた重田稿（658。5月）のほかにも作品研究が四本、演出関連の論が二本。いずれも読み応えあるものだった。

天野文雄「『歌占』の「作意」に挑む」（657。4月）は、シテが地獄の曲舞を舞った直後に神が「憑依して激しく責める」という筋書きに、当時の伊勢神道が持っていた「神本仏従の反本地垂迹思想」が反映しているとする。また、世阿弥が捨てた「憑き物の物狂」である点には「強烈な対世阿弥意識」を見て取る。宮本圭造「能と天災地災―室町後期の能は自然災害をどう捉えていたか」（659。6月）は、観世長俊の《江島》創作の契機として、明応の大地震・大津波の「爪痕を目にし、その恐怖の体験を耳にした」ことがあるのではないかと推定。その前提として、室町後期の能が雨乞いの芸能として重要な機能を果たしていたことを示す。松岡心平「境界の司祭としての菊慈童」（664。11月）は、菊慈童説話成立の背景に『和漢朗詠集』に収められた「重陽の宴の漢詩」群と天台における「稚児灌頂」があることの意味を、自説や先行研究を手際よくまとめながら確認したうえで、さらに、菊慈童の背後に「正月には千秋万歳の祝言に参上」し、重陽の節句には前日に菊を献上」する河原者・散所者の世界があるとの歴史学からの指摘を紹介。能《菊慈童》の詞章からも「菊水の酒を飲んでは捧げ祝言の舞を舞い」「荒蕪の境界地」に立つ「流され人」の姿が読み取れることを言う。竹本幹夫「修羅能〈頼政〉の作風」（665。12月）は、合戦描写が見せ場になる《実盛》に比べ《頼政》は「老体ではあっても修羅とは言いがたい」こと、そもそも世阿弥の修羅能にとって「戦う主人公」は必須ではなく風雅や恩愛の方が重要であること、こうした修羅能の出発点が《通盛》の改作だったのではないかとの推定等、《頼政》に限らず世阿弥周辺の修羅能の全体を見る。また、《頼政》でよく問題になる「扇の芝」については本説とも武家の作法とも関係なく、「能の美的所作」のための工夫であっ

たかとする。

高桑いづみ「謡用語の表記―上歌・序・上ハなど―」（660。4月）は、謡本に記される用語のいくつかについて、世阿弥自筆本や世阿弥伝書からはじめて丁寧に跡づけ整理する。上掛リ下掛リの違いや時代的な変遷もわかりたいへんありがたい。まだ他にも問題となる標記はあるようで、ぜひ続稿を望みたい。小田幸子「「天神の面」をめぐって」（661。5月）は、『申楽談儀』22条にある「天神の面」についての考察。同条の「天神の面、天神の能に着しよりの名也」が言う「天神の能」について、現行の『天神』面の使用例から「広く天つ神（神道の神）あるいは天部の神（仏教の神）」と解釈する『能楽大事典』（筑摩書房、二〇一二年）の見解に反論し、「天神の能」は道真を主人公とする能、「天神の面」は「忿怒相の道真をモデル」とした面であるとする。現行の『天神』面の造形が人間と荒神の性格を兼備しているという指摘や中世以降に多く絵が語れた天神画像のと『天神』面の近さなど、説得力のある根拠が挙げられており、現行『天神』面については小田説に従いたい。ただし、『申楽談儀』に見える「天神の面」に関しては「出合の飛出」と同じものを指しているのだという大谷節子「能・狂言面データベースの課題と可能性」（『演劇映像学２００７報告集２』二〇〇九年）の説が妥当だろう。

演出面に注目した作品研究は2本。米田真理「能《絃上》における演出と主題の変遷―村上天皇は龍王か？―」（『朝日大学一般教育紀要』40。3月）は、《絃上》が龍神に奪われた琵琶を取り返す場面を再現し祝言性を表出する風流能から貴公子の遊舞を楽しむ能に変化したこと、本来の《絃上》では村上天皇が龍王的な存在として描かれていたであろうことなどを言う。伊海孝充「俊寛の姿容―能「俊寛」の歴史」（『日本文学誌要』93。3月）は、能《俊寛》においてシテ俊寛の出立が流儀によりまた個々の役者により大きく違うことに注目、それぞれの出立がいつどのように作られたものであるかを、謡本・型付・書上等の資料を丁寧に追いながら検討する。江戸初期には角帽子や頭巾の僧形であったこと、綱吉・家宣時代に《大原御幸》等などとも関わり花帽子姿が考案されたであろうこと、黒頭姿は元章の考案であること、その根拠になったのが『源平盛衰記』であること等を明らかにする。

引き続き演出関係の研究を挙げる。高桑いづみ「地拍子の古態―早歌からの継承―」（『能と狂言』14。9月）は、謡の古い地拍子に、従来知られていた「早歌Ⅱ型」（早歌としてはシンプルな古形とされる）を継承したいわゆる近古式の他に、「早歌Ⅰ型」を継承した別の地拍子があったことを明らかにする。戦国期の鼓伝書の解読をめざした共同研究（「能楽の国際・学際的研究拠点」主催）の場から生まれたものだが、早歌のリズム型に関する広い知識を背景に、当該伝書の他の記事はもちろん、同時期の他の鼓伝書も調べ上げてまとめられた本論文は同氏ならではの業績。

深澤希望「金春流型付の展開―安照型付から重勝型付へ―」

（『楽劇学』23。3月）は、金春宗家蔵能楽資料調査の過程で見つかった新出型付について、他の伝本との綿密な比較、本文内容の分析等をおこない、八世金春重勝の型付と認定。そのうえで、舞グセ部分の所作の記述法を安照型付と綿密に比較し、型付の記述が細分化されていく様子や所作単元が定着していく様子を明らかにする。諸本調査など基礎的な作業がしっかりと成されており、資料研究としても価値があろう。舞グセ部分の比較・分析も妥当とは思われるが、より具体的な所作のあるクセ以外の部分についても考察が望まれる。筆者本人が「おわりに」で挙げているように、まだまだやるべきことは多くありそうだ。続稿を期待する。『楽劇学』には《研究ノート》として、蒲田紗弓「『歌舞伎囃子の能楽手法』再考―文献にみる大正期・昭和初期の実態」も載る。標題通り、歌舞伎囃子への能楽手法導入を取り巻く言説を調査し、「明治から昭和にかけての風潮は決して一方的な導入／受容の「流れ」ではなかった」ことを示す。

能の技芸伝承そのものを中心的な研究課題とする動きも見えてきている。横山太郎「わざ継承の学を構想する：能楽の技法を中心とする学際的な研究のために」（『能楽研究』40。3月）も拠点の共同研究プロジェクトに基づくもの。人類学・社会学等のフィールドワーク研究から、「わざ言語」「状況的学習論」「会話・行為分析と身体化の人類学」の三つを紹介し、これらの手法を能楽におけるわざ継承の研究に適用することの学問的意義や可能性、あるいは留意すべき問題点等を示す。能楽研究が他のさまざまな領域の研究と結びつき広がっていくために真剣に考えねばならない提言と受け止めた。藤田隆則「〈研究ノート〉能の教授における『自得空間』」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10。6月）は、そうした新しい研究の一つ。稽古における「自得」を知識の密輸入ととらえ、口伝・秘伝等の知識伝授と通ずるものがあるとする。素人であることと「自得」との関係にも触れるが、その部分はよく理解できなかった。

最後に、能をめぐる学際研究というより、従来とはまったく異なる分野から能楽へのアプローチを紹介する。西尾久美子「伝統文化専門職のキャリア形成―能楽師の事例―」（『イノベーション・マネジメント』13。3月）、「能楽の人材育成と事業システム」（『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現代社会研究科後記博士課程研究紀要』10。3月）は、経営学の研究分野の一つとして能楽における人材育成、キャリア形成に注目した研究である。能楽師の修業過程や一人前になってからの能界でのポジション、サポート体制等々を経営学的な視点で分析する。そこに記されている能役者の様子や能界のあり方は我々の既に知っていることなのだが、それが、外の世界の別の視点と用語で整理されることによって、何か判らない特殊な世界ということではなく、多様な分野と繋がっていけるのだと思う。著者は前述の横山稿に繋がる「わざ継承」研究プロジェクトのメンバーでもあった。（以上、山中）

【狂言研究】

狂言研究では近年、絵画資料を用いた研究が増えており、本年は以下の三本があった。田口和夫「天正狂言本〈粟田口〉小考―狂言古図・大名そろへ―」（『鋟仙』655。3月）は、国文学研究資料館蔵『狂言絵』〈粟田口〉の絵柄と『信長公記』に見える「大名揃へ（馬揃へ）」の記事を用いて、『天正狂言本』〈粟田口〉について考察した論である。『狂言絵』に描かれた、大名が粟田口の書き物を読み上げ、すっぱがそれに合わせている絵柄は、主人とすっぱの間を太郎冠者が取り次いで往復する現行〈粟田口〉の演出では成立しないことを指摘する。『天正狂言本』には太郎冠者が取り次ぐのか、主人が直接尋ねるのか表記されていないが、『狂言絵』のように『天正狂言本』も取り次ぎのない、テンポの速い演出であった可能性を提起する。また『天正狂言本』〈粟田口〉の発端である「大名揃へ」が、同じく『天正狂言本』〈宝買〉の発端にもあるので、「大名揃へ」と「宝競べ」は密接に関わるとする。そして織田信長による天正九年の「馬揃へ」は実質、軍勢招集の「大名揃へ」であったことを日葡辞書「馬揃へ」の記事から考察し、信長のおこなった「馬揃へ」の盛儀が「大名揃へ」という形で記憶され、『天正狂言本』〈粟田口〉〈宝買〉に反映されていると指摘する。同じく国文学研究資料館蔵『狂言絵』を用いた論に小林健二「狂言「早漆」の変遷―絵画資料を手懸かりに」（『鋟仙』662。12月）がある。和泉流・鷺流台本や『狂言記外』の〈早漆〉は、二人の大名が登場して二人の烏帽子が引っ付いてしまうのに対して、国文学研究資料館蔵『狂言絵』〈早漆〉には頭に風呂を被った大名が一人と、大名の風呂に紐をかけて引っ張っている塗師が描かれており、登場する大名の人数に違いがあることを指摘する。名女川本『萬聞書』「狂言国付」〈早漆〉の記事からも大名が一人であったことが読み取れ、『狂言絵』が江戸時代前期の実際の舞台の様子を写している可能性を示す。狂言の祝言物では、一つの物を共有する「相合の趣向」がより祝言性を増すものとして見なされるという先行研究から、〈早漆〉は『狂言絵』に描かれるように、「元は大名が一人で登場する曲であったのを、大名を二人にして、より祝言性を高めた曲に改作した」と提起する。藤岡道子「江戸初期の狂言の古図に描かれた女の「かたびら」」（『東海能楽研究会年報』20。3月）は、国立能楽堂蔵『狂言古図』「ろさい太郎」「かまはら」など狂言古図に描かれる女の小袖が、江戸時代の実際の公家や上級武家の女房が用いる夏の衣装、麻のかたびらであることを指摘する。狂言古図に見えるようなかたびらの出どころについては、「狂言の上演劇団への上級階層からの下賜品であった」可能性をあげる点が興味深い。『東海能楽研究会年報』には狂言に関する論として、飯塚恵理人「《藤》間狂言の翻刻と諸本比較」・林和利「『太平記』と狂言」も掲載される。

〈附子〉の類話には『沙石集』が知られているが、それよりも時代を千年以上も遡り、さらに〈附子〉の類話が地域的な広

がりを持って伝来していたことを示した論が発表された。鈴木靖「敦煌写本『啓顔録』について—狂言「附子」の淵源を明らかにした唐代の古写本—」(『能楽研究』40。3月)は、〈附子〉の源流となる話が、唐の開元十一年(七二三)に書写され、敦煌石窟に封印された敦煌写本『啓顔録』(現在は大英図書館蔵)に見えることを指摘する。『啓顔録』の作者や成立年代、諸本との比較、さらに敦煌写本『啓顔録』が石窟に封蔵された理由について論じる。『啓顔録』原本の成立は登場人物の官名や敦煌写本の年記によって貞観十年(六三六)から開元十一年の間であること、敦煌写本『啓顔録』には誤写があり、そのため反古にされたが、文字の記された紙を大切にすれば善報があるとする俗信によって、石窟に封印されたことなどを推定する。木村信太郎「和泉流〈禁野〉と〈牛盗人〉の成立考—語リの働きに着目して」(『法政大学大学院紀要』76。3月)は、大蔵流〈禁野〉の禁野由来・雉の宮助鷹由来の語リが、アドの剥ぎ取りを実行する段取りに組み入れられ、シテに禁を犯していることを気付かせ、剥ぎ取りを正当化する役割を担わせていると述べる。長柄人柱伝説のみを語る和泉流〈禁野〉の語リにはシテに後悔の念を抱かせる効果があり、軽率な行為のために剥ぎ取りに遭ったというストーリーが構想されたとする。天理本〈禁野〉に〈二人大名・昆布売〉のような心持または演技をするという注記から、和泉流〈禁野〉は右二曲との関わりで形成したとも指摘。和泉流〈牛盗人〉では盗みの動機を正当化するために語リが語られ、現行の形の〈牛盗人〉は〈鶏猫〉の影響下に江戸時代中期に成立したと述べる。小林千草「成城〈曲章四番〉狂言本の性格について—名女川本との共通曲を中心に」(『湘南文学』51。6月)は、成城大学図書館蔵『狂言集』のうち、「曲章四番」とある一冊の書誌を示し、所収曲のうち名女川本と共通する〈瞽女座頭・居杭・名取川・文蔵・文荷・武悪・狐塚〉の翻刻と名女川本との相違点を指摘する。本資料については、鷺伝右衛門(十代)が「拱辰先生」と呼ばれていた存命中に、その秘書を岡山義憲が安政四年(一八六〇)に転写してもの」と推定する。

間狂言研究には、岩崎雅彦「道者アイ、三種—「白鬚」「江野島」「竹生島」—」(『国立能楽堂』395。7月)がある。〈江野島〉「道者」の方が構成や演出が簡略であり、〈白鬚〉の方が先行すると提起、〈竹生島〉「道者」結末の道者の女が夫を肩車する演技は、「妻の愛情表現としての肩車と、宇賀神を戴く弁才天の造型とが結びついてできたもの」と指摘する。小林千草「江戸期「間狂言」の言語実態—〈成城本「黒塚ノ間」の場合〉」(『東海大学日本語・日本文学研究と注釈』5。10月)は、間狂言〈黒塚〉と本狂言〈老武者〉を所収する成城大学図書館所蔵狂言台本の、間狂言〈黒塚〉部分の翻刻と、貞享松井本との比較考察をおこなう。山下宏明「平家」物の能と間狂言カタリアイ」(『日本文学』65(2)。2月)は、〈実盛〉〈八島〉の間狂言を読み解き、「カタリアイ」は「能内部の世界を世俗、外から解説、相対化しながら能の活性化を図るも

の」と位置づける。

その他の狂言研究は以下の通りである。関屋俊彦「『わらんべ草』の転写事情」（『紫明』39。9月）は、著者所蔵の『わらんべ草』（書名「むかしかたり」、川瀬一馬氏旧蔵）を紹介、本文冒頭が二段から始まる点、二十六段に〈枕物狂〉の曲名が示される点、図が入っている点、楽屋での振る舞いの記述が多い点などを指摘する。『童艸肝要集』・下田文庫『童草』・高安吸江蔵『童子艸』が書写された状況にもふれる。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介（9）―追い込みの演出―」（『学苑』905。3月）は、追い込みをいったん止める狂言作品の考察から、馬瀬狂言の演出の特徴を論じる。黄龍夏「鷺流狂言台本における「なかなか」」（『日本語文學 Journal of the Society of Japanese Language and Literature, Japanology』75。9月）は、保教本・賢通本に見える「なかなか」の使用状況を調査した論。長島平洋「狂言の笑いを取り出す」（『笑い学研究』23（0）。12月）は、狂言作品の笑いのパターンを抽出し検討をおこない、狂言の笑いが和楽〈皆がなごやかに楽しくなる〉こと）にあると述べる。

本年度も翻刻資料が数多く公開された。坂本清恵 加野友理 野見山優 野中くれあ「大蔵流茂山家狂言台本の翻刻と紹介」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』22。3月）は、日本女子大学文学部日本文学科所蔵の茂山家台本二十七冊のうち、〈千鳥〉〈狐塚〉〈入間川〉〈末廣がり〉の四冊の翻刻と書誌を掲載する。狂言研究会「『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻（十・終）」（『あいち国文』10。6月）は、文久元年から二年にかけて書写された、鷺仁右衛門派の特徴を有する『文久写本狂言集』の翻刻。所収曲は〈千鳥・仏師・布施無経・縄なひ・歌仙〉。小谷成子・佐藤友彦・田崎未知・野崎典子・林和利・安田徳子・米田真理「「狂言共同社蔵『秘傳聞書』翻刻（七）」（『名古屋芸能文化』26。12月）は、狂言共同社所蔵の和泉流山脇派の伝書『秘傳聞書』上巻前半の翻刻。表題紙裏の翻刻によると、本書は文化四年十月末頃からの見聞記であることがわかる。飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「項語間」」（『椙山女学園大学研究論集 人文科学篇』47。10月）は、第五冊目の翻刻。所収曲は〈項羽・舟橋・錦木・女郎花・鵜飼・阿漕・遊行柳・鵺・融・熊坂・雲林院・伏木曽我・猩々・書写・信夫・獅子・草薙・泣不動・求塚・鍾馗・松虫〉。飯塚には『副言巻』と佐藤友彦氏蔵の山脇得平稽古本〈小鍛冶〉間狂言の翻刻を紹介した「《小鍛冶》試解―間狂言が示す上演への過程―」（『紫明』39。9月）もある。（中司）

【国語学的研究】

虎明本狂言が、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」に収録され、全文が（品詞、会話・ト書きの別等も含め）検索可能となった。田中牧郎「通時コーパスの設計『日本語歴史コーパス』による平安時代と室町時代の語彙の比較」（「国語研プロジェクトレビュー」六―一）は、構築当事者による報告

論文で、虎明本の本文（ト書き、又間狂言含む）の本文を品詞切りした上で、自立語に就ては、「分類語彙表増補改訂版」（二〇〇五年）によって意味分類して、語彙の意味構成の時代差を論じ、平安よりも室町が「抽象的関係」の語彙で3倍、「人間活動」で1.5倍の割合を占める様に変化したと論じる。しかし、具体的に語を見ると、「抽象的関係」に分類された「次第」、「人間活動」に分類された「一声」は、前者はその104例中47例、後者は28例全例が、登場楽とその謡であるのに、「一声」に「（鶴の）一声」（分類語彙表1.3人間活動・精神および行為）を宛てるという、能楽というジャンルには全く無頓着な、単純文字列一致による処理の結果である。大量データは、機械処理すれば必ず何らかの出力が得られる。能楽の「一声（イッセイ）」と「鶴の一声」を同一視する様な処理の結果が、「語彙比較」として公表されるのには、少なからぬ懸念がある。

村田菜穂子他「狂言ならびにキリシタン資料の形容詞についての一考察」（大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要29（2）。1月）は、虎清本のシク活用率が他の天正本・虎明本等に比して高いと示し、「おさえておくべきであろう」とするが、Fisher検定を試みた結果は10％の偶然で有意性は無い。又、八代集・訓点資料（慈恩伝承徳点）のシク活用形容詞が「極端に少ない」とするのも、虎明本との差に有意性は無く、いずれも偶然の差の域を出ない。この様な計量には、（多重検定に配慮した）統計的検定が伴う事が望まれる。

田和真紀子「古語と口語のはざまにある『天草版平家物語』の語法に関する一考察―「コトノホカ」と「モッテノホカ」の用法をめぐって―」（『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』、24。3月）は、キリシタン版口語体「平家」について、文語『平家物語』（ここでは龍谷覺一本に拠る）を口語化する際に、編者が意味・用法を操作して、「意図的に古い意味・用法を残したり新しい意味・用法との衝突を避けたり」したと推測し、その対比資料として、「同時代の日本語母語話者の口語文体における…用法を確認するため」に虎明本狂言・天理本狂言六義を用いる。キリシタン版では編者が意味・用法を操作したと認定し、狂言台本にはそれが無いと前提する点は、（現在の様に諸台本が自由に見られる時代ではなく）版本狂言記に強く依存した亀井孝（一九四四）「狂言のことば」以来の、意図的整理の結果として狂言の言語観を勘案しての、更なる探究を促す。（豊島）

【翻訳・比較文学研究】

エマート、リチャード「資料紹介　英語能「鷹の井」：英語能となったイェイツの劇作品（１９８１）」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』27）は、能法劇団による標記の作品を取り上げる。イェイツの *At the Hawk's Well* の詞章をほぼ原文通りに用いた同作品は、英語能としては初めて、小段構成や節付け、囃子等の音楽面において伝統的な能の形を踏襲した（作曲・音楽監督エマート）。この「最初の英語能」構築に

際する工夫や苦心した点を記し、小段構成を記した再演版の英語台本、および、二〇〇二年までの詳細な公演記録を収録する。

新作能研究についてはもう一点、式町真紀子「英雄像の再生――劇詩『闘技士サムソン』から新作能『散尊（サムソン）』へ」（『学習院女子大学紀要』18）がある。第10回国際ミルトン・シンポジウム記念行事の一環として二〇一二年に国立能楽堂で上演された標記の新作能（高橋睦郎台本）と、原作にあたるミルトン作『闘技士サムソン』およびその更に元となった旧約聖書「士師記」の記事との異同を精査し、「士師記」が賛美するサムソンの自爆テロ的行為が、ミルトンの詩劇ではやわらげられ、能では強く批判されていることを指摘する。

多木陽介「Ennen延年プロジェクト：伝統と創造力の間での狂言再生の試み（２００９-２０１５）（中近世の日本とイタリアにおける仮面喜劇の生成発展と現代的実践について）」（『桃山学院大学総合研究所紀要』41（3））は、同プロジェクトが古典芸能に対してとる批評的アプローチを、実践例と共に詳述する（同プロジェクトに関連して、前年の同誌に小笠原匡と和栗珠里による狂言とコンメディア・デッラルテの比較論文が所収されている）。江戸時代の狂言の型と台本の固定化・様式化は、十六世紀の西洋宮廷文化における道化と狂気の規律化にも似て、近代的統治が秩序攪乱に対して向けた抑圧がもたらしたもの、という歴史認識が、このプロジェクトの出発点である。プロジェクトの目的は、型が定まる以前の「原型」に近い狂言の形へと遡及し、また権力や権威を批判する狂言の原初の「オリジナルな生命」を掴むことにある。そのための補助的ツールとして採択されたのが、狂言と様々なレベルにおいて共通点を持ちつつも、一時期継承が途絶えたために狂言ほどの様式化を経なかったコンメディア・デッラルテの身体的・演劇的手法であった。コンメディア・デッラルテの身体表現ワークショップ、その手法による複数の狂言作品の翻案上演、シンポジウム等の実践的な活動を通じて得られた、個別の型の新たな意味、一般的な型そのものの特性、作品が持ちうる現代性・批評性など、示唆に富む知見が述べられている。なお同プロジェクトにコンメディア・デッラルテ俳優として参加したアンドレア・ブルニェラも、同誌所収の「Sull'Espeienza Ennen（中近世の日本とイタリアにおける仮面喜劇の生成発展と現代的実践について）」において、狂言との身体的対話が、演劇様式の根源にある表現エネルギーへと遡及する「想像力の再獲得」を自分達にもたらしたと説いている。

狂言をめぐる比較研究としては他に、真鍋晶子「パウンド、イェイツ、ヘミングウェイの日本との邂逅――狂言をめぐって」（『東京女子大学比較文化研究所紀要』77）がある。パウンドとイエイツが、フェノロサの遺稿と久米民十郎を通じて狂言（とりわけ「不聞座頭」）についての知識を得た経緯を追い、さらにその後パウンドから助言をうけたヘミングウェイ

の詩が、乾いたユーモアを通じて表現される人間の残虐さ、軽妙な言葉の音楽性、低俗視される語の使用、という点で狂言との共通点を持つことを論じる。しかしこれらをパウンド経由で得られた「間接的な」狂言からの影響とするには、両者の比較はまだ大雑把にすぎるように思われる。

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○ Jonah Salz ed. *A History of Japanese Theatre*. Cambridge: Cambridge University Press, 2016. 550 pp.（ジョナ・サルズ編『日本演劇史』）

第一部で伝統演劇を、第二部で現代演劇をとりあげた後、第三部から第六部にかけては様々な切り口で日本演劇の諸相を論じる（第三部「弧とパターン」、第四部「劇場建築」、第五部「演劇批評」、第六部「異文化間の影響関係」）。それぞれの中に「能」「伝統演劇のメタ・パターン」などの大項目が置かれる一方、「黒川能」「能の中の女性」「観世寿夫」など、より限定的なトピックを扱う短い記事がそこここに差しはさまれている。こうした特徴的な構成が示す通り、本書は「演劇史」とは題していても、単に日本の演劇を時系列に沿って追うだけのものではない。演劇の諸ジャンル・諸相が互いにどのように関連しているのか、またそれらが社会や文化とどのような関係を切り結んできたのかという、演劇を構成する諸要素のダイナミックな相関関係を明らかにする大変刺激的な書物となっている。なお上記に引いたもの以外で能楽に関連する記事には、以下のようなものがある。「狂言」「能舞台」「世阿弥」「西洋における最初の能巡業：ヴェニス博覧会」「能と複曲」「能狂言の装束と面」「大倉虎明」「家族間のライバル関係」「家元」「前近代の劇作実践」「前近代における観客と場」「前近代の演劇実践者の原理：世阿弥から近松へ」「国際的な伝統演劇トレーニング」「松井とエマート：能楽教育の先駆者達」「異文化間の能：幸運な邂逅」「20世紀初頭のヨーロッパにおける影響」

○ Edward R. Drott. *Buddhism and the Transformation of Old Age in Medieval Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2016. 220 pp.（エドワード・ドロット『中世日本における老人の変容と仏教』）

上代から中世にかけての日本で老人の身体の持つ意味がどのように変容したのかを、記紀、致仕表、説話、能など多様なテキストから読み解く本書が明らかにするところによれば、老人は当初、「中央」が周縁に排除しようとするもの（醜さ、穢れ、死すべき体等）を体現していた。しかし中世には、老人の身体を、二項対立を覆す超越的な力を具えたものと見なす仏教的な解釈が広がり、「神の高齢化」とも呼ぶべき現象が現れる。最終章の第七章は能、とりわけ式三番と神能の分析にあてられ、こうした老人表象の変容の結果として、超越的な力を多義的に秘めた能の翁が生まれたことを説く。また

本書は、時代を経て変容した老翁の表象と対比して、老女が「救済されぬ他者」であり続けることにも注目する。老女の姿の中に至高の美を見出す能の老女物は、この文脈において非常に例外的な老女観を示しているといってよい。大きな時代・文化の流れの中で能の老翁・老女表象を捉えなおす良著。

○ Leo Chingchi Yip. *China Reinterpreted: Staging the Other in Muromachi Noh Theatre.* New York: Lexington Books, 2016. 230 pp.（レオ・シンチ・イップ『再解釈された中国：室町期の能における他者の舞台表象』）

能において、中国という「他者」が、「我々」と対置されてどのように表象されてきたのかを、以下の五つのタイプにわけ、十一の作品を通じて明らかにする。（一）「吉兆なる他者」（〈西王母〉〈東方朔〉〈鶴亀〉）、（二）「同情される他者」かつ「彼方の我」（〈昭君〉〈楊貴妃〉）、（三）「異国的な他者」（〈石橋〉〈龍虎〉）、（四）「危害を加える他者」（〈白楽天〉〈善界〉）、（五）「和合する他者」（〈三笑〉〈唐船〉）。作品内の中国素材の役割は、制作当時の社会的・文化的状況を視野にいれて子細に分析され、またこれらの中国素材が能以前に日中両国においてどのように表象され受容されてきたのかも、丁寧に辿られている。こうした作業を通じて、これらの唐物の能が、中国そのものを描こうとしたものではなく、日本で発達した伝統的素材をその時々の社会・文化的要請に応じてさらに発展させたもの、すなわち「修正された我」であることを説く。

○ Carrie J. Preston. *Learning to Kneel: Noh, Modernism, and Journeys in Teaching.* New York: Columbia University Press, 2016. 352 pp.（キャリー・プレストン『跪くことを学ぶこと：能、モダニズム、そして教えのなかの旅』）

「盲目的な服従と模倣」は、自律と新たな創造を良しとする近代欧米の価値観においては否定的に見なされている。しかしそのように切り捨てるべきものではないこと、またこの盲目的な服従がある種の快楽をもたらすものでもあることを、本書は、著者が受けた能の稽古体験や、フェノロサからパウンド、イエイツ、伊藤道郎へとつながる英語圏の能受容を詳細に追いつつ説く。ただし仕舞・謡の稽古を、近代欧米の価値観と相いれない盲目的な服従の例として特別視することには疑問が残る。一本一本の指の角度までが教師によって規定される西洋バレエの稽古は、盲目的な服従とは呼ばないのだろうか。

◎論文

○ Jonah Salz. “Mediating Traditional Theatre: Technological Strategies for Interpreting Japanese Performing Arts”『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』18（ジョナ・サルズ「メディアを通じての伝統芸能：能狂言、歌舞伎、文楽の翻訳、解説の戦略」）

国内外を問わず、観客にとってますます理解の難しいものとなりつつある日本の伝統演劇(とりわけその言語)と観客との間の溝を埋め、観客理解を助けるための様々な補助手段がどのように発達してきたのかを、江戸時代以降現代にいたるまで追う。取り上げられるものは、詞章や解説の出版、劇場パンフレット、外国人向けの短縮版上演、翻訳、バイリンガル上演、イヤフォンガイド、字幕、上演前のレクチャ―、体験講座、現代劇の劇作家への新作委託や、異ジャンルのコラボレーションなど。翻訳・解説という試みの延長上にジャンル横断的な新作制作を置く視点が、興味深い。(竹内)